

アメリカの中国観

只今ご紹介いただきました山極でございます。東洋学研究所の講演会として、私自身が今関心を持っている問題、「アメリカの中国観」というテーマを選ばせていただきました。

ご承知のように中国とアメリカという二つの大国は、今後の世界において非常に重要な地位を占めていくと思われませんが、しかし、その関係は必ずしもうまくいっておりません。最近APECの会議で、クリントン大統領と江沢民主席とは、米中関係を改善していこうという明るい話し合いをしたことがニュースになっております。それがうまくいくことを期待しておりますけれども、しかし、米中関係が明るい方向に進むものには、まだいろいろな障害があるわけでありませぬ。

例えば、中国の政策や方針を日本語の文献で早く知るには、『北京週報』という週刊誌がありますが、この十月十五日号ですね。まだそれほど経っておりませんが、これが「中米関係の現状を分析する」という特集を組んで米中関係を論じております。

山 極 晃

この号の諸論文ではアメリカの中国政策をかなり批判してありまして、その中の思誠「ノーといえる中国」では、中国で今年出版された『ノーと言える中国』^(注1)という本を紹介しております。

これはご承知のように、日本で石原慎太郎氏等が『ノーといえる日本』という本を出しておりますが、それをもじったものですね。そして中国は決してアメリカの言いなりにはならないんだ、我々の主張をちゃんと貫いていくんだということを述べています。

また金燦栄「中米関係—回顧と展望」という論文は、いま中国とアメリカの間には、大きく分けて三つの問題があると指摘しています。一つは台湾問題を中心とした中国の主権にかかわる問題、二つ目は、これは中国側はイデオロギーの問題とっておりますが、要するに人権の問題、第三番目は経済摩擦。こういうように中国側は厳しい態度をとっておりますし、一方アメリカにもまた中国に対してかなり厳しい論調があります。

先にふれたように、クリントン大統領が中国との関係改善に向

かうという発表をいたしました。すると早速アメリカの『ワシントン・ポスト』を始めとして、いくつもの新聞が、人権問題をおろそかにして改善がありうるのかといった批判をしているわけです。

しかし、今日のお話は、現在の米中関係がどうなるかということとを直接の対象にはいたしません。むしろ、アメリカと中国との関係が重要であるのに、非常にギクシヤクしているのはなぜなのかということを理解する材料として、米中関係、特にアメリカ人の中国観、あるいは中国に対するイメージというものを歴史的に考えてみたいというのが、今日のお話の中心であります。

それでついでですが、さっき申し上げた『北京週報』というのは、我々が手つとり早く中国の主張を知る上で役に立ちますが、台湾の方には、『中華週報』というものがあります。これも週間ですね。ですからこの両者を見れば、中国と台湾の主張がわかると思います。

さて、アメリカの中国観、あるいは中国に対するイメージという問題では、実はイメージということを政治学的方法の問題として、本当は議論しておかないといけないんですが、ここでは非常に大雑把に常識的なイメージ論で進むことにいたします。

まずレジュメのIIのところに対中イメージの変遷と書きました。これはハロルド・アイザックスという人の『中国のイメージ』^(注2)という本からとったものであります。わかりやすい時期区分で

ですので、それに従って進めたいと思います。それによるとアメリカの建国から一九世紀三〇年代までを尊敬の時代としておりまして、ところが一八四〇年代から一九〇五年までが軽蔑の時代、そして一九〇五年以後一九三七年までが恩恵の時代。さらに一九三七年から四四年までが称賛の時代。そして四四年から四九年までが幻滅の時代。四九年以降が敵視の時代というふうに分けております。この本はもともと一九五八年に出版されたもので、従ってその後の変化については当然とりあげていないわけでありまして。それであまり適当とは思えないのですけれども、一応私は一九七二年以降を調整と模索の時代というふうにいたしました。こうした時代区分で、アメリカの中国観というものを見てみたいと思っております。特に称賛の時代から幻滅の時代になり、さらに敵視の時代へと非常に変転の激しい時代、この時期に重点をおいてお話をしたと思います。

ところで、アイザックス自身も言っていることですが、各時代のイメージというものは矛盾して、本来一つのものになっていることはない。つまり中国が非常にいいというふうには、仮に多数が見た場合でも、中国は全然だめだという、そういう見方をする人もいるわけでありまして。要するに各時代のイメージというものは常に対立したイメージが複数存在していて、その中でどういうイメージが比較的主流をなしているかというふうに見ないといけないわけで、最初にそのことをお断りしておきたいと思っております。

まず尊敬の時代ですが、これはアメリカの建国から一九世紀に至る時代で、当時アメリカにとって中国というのは非常に遠い国でありました。しかし、遠い国であるけれども非常に永い歴史と文化をもった大帝国であって、中国からの優れた芸術品であるとか、その他の文物が伝わってくる。そして中国に対するロマンチックな憧憬、あるいは中国の物に対する評価というものが、それから中国の文化一般に対する尊敬というものが存在していた。勿論、この時代には中国を知る人は非常に少なかったわけですから、それをもってアメリカの中国観とすることには問題があるとも言えましょう。また当時のヨーロッパの影響もありまして、ヨーロッパ特にフランスでは、いわゆるアジア、東洋への憧れみたいなものが強かった時代であった。そういうことも影響していたというふうに言えます。

次に一八四〇年というふうに区切っているのは、これはつまりアヘン戦争ですね。当時は清国ですけれども、大帝国がヨーロッパ諸国の侵略をうけて、それに抵抗できないで、ズルズルと敗れていってしまう。そういう姿を見て、中国というのは見かけ倒しで、非常に弱いんだ、中国というのはどうしようもないんだというような、軽蔑のイメージに転換をしていった。

一方、この同じ時期にアメリカにかなりの中国人が、なかば労働奴隷に近い形で連れていかれました。彼らはアメリカの鉄道の建設とか、その他いろいろな重労働に従事するわけですが、そう

した中国人に対するイメージというものも影響を与えていると言うことができます。

そして、当時中国と関わりをもったアメリカ人達というのは、主として貿易商人、それからキリスト教の宣教師です。特に、キリスト教会の関係者たちは、このように情けない中国に対してキリスト教の教化をし、そして彼らに文明というものを教えてやるべきだというような、そういう考え方もあった。アメリカ史の中では、当時「明白な運命」ということが言われていました。

アメリカ人は、アメリカ大陸を、ほとんど東部から西部へ開拓を進めていった。その際彼らは原住民であるインディアンを教化することが、我々の神から与えられた運命なんだという主張を展開していくわけで、これはインディアンの中からすれば、彼らを支配するイデオロギーにはかなりません。そのアメリカの開拓が太平洋側にまで達したのは、だいたい一九世紀半ばでありまして、それ以後その「明白な運命」というものは、アジア・太平洋に出て行くことになるわけで、その主な対象が中国であったと言っよいと思います。

そしてこうした宣教師を中心とした人達にとっては勿論、中国人をキリスト教に改宗させることが大きな目的でしたけれども、それだけでなく、学校を作ったり、あるいは中国人の考え方を変えさせよう、より近代的な考え方に変えさせていこうというような活動を進めていきました。そして自分達は中国人達の保護者

だというような感覚や意識を持つ人達が増えて行くわけでありまして、恩恵の時代とここに書いてありますけれども、要するにアメリカ人と中国人達との関係というのは、保護者と被保護者というような、そういう関係として見ていくようになりました。これが恩恵の時代（一九〇五―三七年）で、日露戦争後、アメリカ人たちの中国への関心が高まって参ります。

ところが突然、一九三〇年代に今度は称賛の時代（一九三七―四四年）というふうに大きく変わっていくわけです。そして、変わったかと思うと今度は幻滅の時代（一九四四―四九年）、さらに敵視の時代（一九四九―七二年）へと非常にめまぐるしい変化をするわけですが、これは実は日中戦争と大きく関係している。ご承知のように一九三七年という年は蘆溝橋事件に端を発して、日本と中国との全面的な戦争に入ってしまった時期であります。

そしてなぜこの時に、称賛の時代に入っていくのかと言いますと、それ以前の時代には、中国人は砂のようなものだと見られていた。つまり中国人が西欧の圧力に対して有効に対応できないのは彼らが皆ばらばらである、非常に個人主義的であって、まとまることがない。ところが日中戦争に際しては、この前後に日本の侵略に対して反対する動きが全国的に沸き上がってきまして、抗日のための民族統一戦線を結成した。要するに日本に対して団結して戦おうという動きが現われて参りました。

特に一九三七年に上海で日本軍と戦った国民党の軍隊ですが、

この軍隊の抵抗は非常に強烈であって、しかも上海というところは、ご承知のように欧米人が多数居住しているところであって、その眼前で中国側が非常に強い抵抗力を示したということで非常に注目された。これはアメリカ人だけではありませんけれども、欧米人の間に中国人は団結することができるんだ、指導者がよければ中国も団結をし、有効に戦うことができるんだという評価が出て参りました。

その指導者の代表とされましたのが、中国国民党、つまり国民党の蒋介石であったわけで、蒋介石は当時のアメリカにおいては、中国の英雄的な指導者というように評価された。そして、その夫人である宋美齡もです。宋美齡は蒋介石よりかなり若い美貌の夫人であって、アメリカで学んだクリスチャンですね。

彼女はいわゆる宋三姉妹の一人です。宋家には三人の姉妹がいて、この三人がみな中国の現代史において、非常に大きな役割を果たしている。

その一番上のお姉さんが宋靄齡で、孔祥熙の夫人になります。孔祥熙という人は、中国国民政府の財政部長つまり大蔵大臣などをやった実力者です。

そして二番目が宋慶齡で、孫文の夫人であり、三番目の宋美齡が蒋介石の夫人です。そして、宋慶齡と宋美齡とは後に政治的に真っ向から対立するわけです。

宋美齡は戦争中アメリカに中国への支援を求めに言った。特に

一九四三年の訪米が有名ですけれども、その時に彼女はアメリカの議会で演説をいたしました。大変評判がよかった。要するにこの時代、日本の侵略に対して勇敢に、しかも英雄的に戦う中国という評価が出てきたわけでありませう。

もう一つ、ここにエドガー・スノーの『中国の赤い星』をあけておきましたが、これはもともとは一九三七年一〇月にイギリスで出た本であり、アメリカでは三八年一月に出版されました。日本ではいまでもすぐ手に入る文庫本で出ております。

当時、つまりエドガー・スノーがこの本を出すまでは、中国共産党というものは、殆どアメリカ人の目には写らなかつた。そして、ときたま入るニュースでは中国共産党を匪賊あるいは反乱者というふうに見ていた。非常に無視されてきたわけです。ところが、スノーは中国共産党の根拠地である延安地区へ一人が入って、毛沢東をはじめとするいろんな人達と会って、中国共産党の実情というものを初めて世界に知らせた。スノー自身はマルクス主義者ではありませんで、リベラル左派といつてよいかと思ひます。

彼は当時の世界の中では、ドイツや日本の侵略に反対するという立場、そのために中国では共産党と国民党とが一緒になるべきだ、協力すべきだという、そういう立場をとっていた人でありませう。エドガー・スノー一人に限りませんが、当時はアメリカのジャーナリストの何人かの人達が同じような立場で報道し、中共地区に行ったり、あるいは宋慶齡について書いたり、色々な活動を

したわけで、そういう意味で、中国共産党についての新しいイメージを作っていく上で、この人達の果たした役割が大きかつたということができません。

ところが、この称賛の時代というのは、アイザックスによれば、一九四四年で終わって、それから幻滅の時代に入ったというふうになっております。

四四年という年は、戦争が終わる一年前ですね。それで私のレジュメの中では一九四四年にステイルウエルの解任というふうに書いておきました。ステイルウエルはアメリカ軍の司令官です。当時中国、ビルマ、インドがアメリカ軍の一つの戦区になっておりました。その司令官がステイルウエルという人ですが、同時に蒋介石の参謀長を兼任しておりました。そして蒋介石とステイルウエルはやがて戦略方針の面でも、個人的にも非常に対立しました。その結果ステイルウエルはアメリカ政府によって解任されたわけでありませう。

当時中国にいたアメリカ人達は、ローズヴェルト大統領が、蒋介石に妥協したといつて批判したわけですが、その問題に入る前に、つまり四四年になって急に幻滅したわけではありませうので、少し前にさかのぼってみたいと思ひます。

一九四一年に太平洋戦争が始まりました。アメリカと中国は同盟国になった。それとともにアメリカ軍が中国にかなり入って行きました。それからまた、中国軍とアメリカ軍との共同作戦も行

なわれた。これはビルマなどで行なわれたわけです。この太平洋戦争の時期に約二五万人のアメリカ人が中国へ行つたと言われております。これだけ多くの普通のアメリカ人が中国人と接する、あるいは中国の土地で生活をするということが起こつたわけです。そして彼らは称賛されていた蒋介石を中心とする抗戦というものが実際とあまりに違うことに気づきます。

この時期に蒋介石の国民政府は揚子江の上流の重慶に退いている。そしてそこに何年も過ごすわけで、そうしているうちに、中国政府及び中国政府を作っている国民党の腐敗ぶり、あるいは弱体化ぶりというものが目につくようになってまいりました。

当時アメリカの外交官達は中国の実態について、非常に多くの報告書を送っておりますけれども、そういうものを見ますと、中国政府の高官たちはお互いに権力争いをして、自分達の土地と財産を増やすことばかり考えていて、本当に日本と戦うことを考えている指導者は少ないと批判しております。実際に困難な状況になってまいりますと、農民達に対する支配も強化される。当時の資料を見ると、政府は農民に対して、今年分の税金ではなくて、来年、再来年分の税金の前取りというようなことまでやって、農民達は非常に苦しむ。

そして一九四四年頃の戦場で、日本軍に攻撃されて逃げて行く国民党軍を農民達が逆に襲つたというような報告もあるくらいであつて、中国の抗日戦争、戦争への努力というものの実態がどう

も額面通りではない、このままでは中国はどうなるのかというような心配がアメリカ人達の間に出て参りました。

そして他方、先程ちよつと申しました共産党はですね、日中戦争が始まったところは小さな勢力でありました。ところがこの戦争を通じて農民と結びついて、いわゆるゲリラ戦、毛沢東流に言えば、人民戦争というものをやったことによつて、だんだん共産党の勢力は広がって参ります。そして、中国共産党の力が強くなつて参りますと、国民党の側では、それを脅威に感じる。そして、むしろ日本と戦うよりも共産党をいかにして抑えるかということに関心が向けられていくわけです。一方共産党の方も、国民党の攻撃に対して、絶えず準備をしなければならぬというようなことで、当時のアメリカの外交官達は、このままで行けば戦争が終わらないうちに内戦になるのではないかとということを中心とするようになりました。こうした状況を踏まえて、外交官達は、こういう状態になってきたのには、やはり国民政府の腐敗と弱体化があるので、政府を改革しなければ、よくならない。従つてアメリカは蒋介石政権に対して援助を与えるだけではなくて、改革を要求しなければいけないという主張をいたします。

他方共産党に対しては、共産党と国民党が協力して戦争をやり、そして両者の勢力を含めた幅の広い政府を作るように働きかけていくべきだというのが、この人達の主張であり、考え方であつたわけであります。そして、スタイルウェル司令官はこうした外交

官達の分析を認め、彼自身も蒋介石に対して、もっと圧力をかけるべきだという主張を持っていたのです。

これに対して蒋介石の側では、大変反感を抱きまして、結局両者の対立はスティールウエルの解任という事件にまで発展したわけでありませぬ。

こういう状況の中で、中国の現実に対するアメリカの幻滅が広がっていった。それまで、蒋介石を指導者とする国民政府が抗戦を戦いぬき、中国をまとめ、統一して、戦後のアジアの中で、アメリカの友好国として重要な役割をになうだろうという期待があったのですが、それが疑わしくなっていく。一九四三年に、ローズヴェルトは、中国を四大国の一つにするという決定をしておりますが、それにふさわしくないじゃないかという見方も広がって行くわけでありませぬ。そして四五年に戦争が終わります。

そして戦後、アメリカは第二次大戦中、陸軍参謀総長であったマーシャルという人物を中国へ派遣いたしましたして、国民党と共産党との対立を調停するわけですが、結局失敗に終わって、中国は内戦に突入していく。アメリカは国民政府を支援し、援助を与えますけれども、結果的には国民党の敗北、つまり共産党が勝利をして、一九四九年に中華人民共和国が成立することになるわけです。そして、蒋介石は台湾に移ります。それで、こうした時期が幻滅の時代、つまり、もう中国は見込みがないという幻滅の時代ということになります。

ところが、その後敵視の時代と書きましたように、実は四九年から五〇年の時期というのは、アメリカと中国との関係及びアメリカにおける中国問題が、非常に大きな問題となった時期であります。それでレジュメにいくつか分けておきましたが、まず第一番目に静観政策、台湾不干渉声明と書きましたが、国共内戦で、共産党は勝利をして、負けた国民党は台湾に移るわけですが、こうした事態に対して、どうするかという点でアメリカは当時あまり積極的な政策はありませんでした。

ところがその後、つまり一九五〇年二月に中国はソ連との間に友好同盟相互援助条約を結んで、はっきりとソ連と同盟関係を結ぶ。そして、それから数カ月たった六月に、朝鮮戦争が勃発するわけです。北朝鮮軍が韓国に攻め込んで、いわゆる武力統一政策にでるわけです。これに対してアメリカは軍隊を派遣して韓国の支援に立つわけです。ところがこのアメリカ軍が三八度線をこえて中国の国境に近づいて参りますと、中国側では、いわゆる人民志願軍という名前で朝鮮半島に兵を進めます。その結果、アメリカと中国とは武力衝突つまり戦争になるわけです。これはアメリカの方は国連軍という名前、つまり国際連合の派遣という形を取りますし、中国は中国が参戦するというのはなくて、人民志願軍が参戦するという形をとって、つまり国と国との戦争という形を取りませんけれども、実質的にはこれはまさに米中の戦争ですね。そしてその結果、アメリカと中国の関係は非常に悪化

します。

のみならず、アメリカは朝鮮戦争で北朝鮮軍を抑えて、朝鮮半島が統一できると思っていたのに、中国軍が入って来たことよって、結局三八度線、つまりもとの三八度線に近いところで停戦しなければならなかった。これは第二次大戦後に超大国として自信を持っていたアメリカにとっては大変な衝撃であり、それだけに中国に対する恨みといえますか、中国に対する敵対心を強めることになった。

第二番目の問題として、台湾問題とここに書きましたが、台湾は一九五〇年の段階までは、アメリカはカイロ宣言という第二次大戦中に出した宣言の中で、台湾及び澎湖諸島は中国に返還するということを宣言しておりました。そして戦争が終わりますと、国民党の軍隊が台湾を接收したわけでありました。

ところが今度は中国共産党が勝利を占めますと、台湾がどうなるかということが大きな問題になって参りました。当時トルーマン政権、民主党政権は、台湾は共産軍によって軍事解放されたら仕様がないうという、一種の諦めといえますか、静観論であって、それがさつきあげました台湾不干渉政策という声明であります。つまりアメリカは台湾に対してなんら野心を持っていないと言いうことを述べたわけでありました。ところが朝鮮戦争が始まりますと、同じトルーマン大統領が韓国にアメリカ軍を派遣すると同時に、台湾海峡に艦隊を派遣する。そして、共産軍の攻撃を阻止すると

いう声明をいたします。

要するにアメリカは台湾問題にコミットするという決定をここに下したわけです。しかも台湾の帰属はまだ未決定なんだという立場をここで声明いたします。これに対して、中華人民共和国側は、中国に対する内政干渉であるといって激しく非難するわけで、ここに現在までつながっている台湾問題というものが発生したことになります。

それから第三番目として、ここにマッカーシー旋風と書きました。五〇年二月にジョセフ・マッカーシーという共和党の上院議員が、国務省には二〇五名の共産党員がいるという演説をして、センセーションを巻き起こしました。これに対して上院では、「国務省員の忠誠調査」という聴聞会を開きます。つまり関係者を呼んで、その問題についての調査をしたわけでありました。これは普通赤狩り、つまり共産主義者を摘発して弾圧をするという赤狩りというふうに言われております。しかしマッカーシーは最初二〇五名と言いましたが、議会では九名の名前を挙げたに過ぎなかった。その九名の中で、中国問題に関係する人物は、フィリップ・ジェサップ、ジョン・サーヴィス、オーエン・ラティモアという三人に過ぎなかったわけでありまして、マッカーシー自身も非常にデマゴギー的な面が出てはいるわけですが、このうちサーヴィスという人は、第二次大戦中に中国に派遣されていた外交官で、さつき申し上げましたような報告を書いた中心人物であって、彼

はとくに狙われたわけでありませう。

それからラティモアは、一時蒋介石の顧問になった人ですけれども、もともとは研究者であり、特に中国の辺境地帯の研究者であつて、非常に多くの著書のある人であります。しかし調査の結果、この上院の委員会ではマッカーシーの告発には根拠がないといつて、これを却下することになります。それで終われば特に問題はなかつたんですが、ところがその最中に朝鮮戦争が勃発をいたします。

先程申しましたように、米中の軍事衝突が起つていくわけで、中国に対する反発がものすごくアメリカ国内に強くなっていきました。そして共和党議員の中には、蒋介石支持派、これは中国派というふうに呼ばれておりますけれども、そういう人達がかかりいて、民主党の中国政策を非難し、マッカーシーに同調して行くわけであります。

そしてさらに議会外のチャイナロビーと言われる、これも要するに蒋介石に対する支援を働きかける、そういうグループが大いに活躍をして、急速にマッカーシーの力は強まって参ります。さらに朝鮮戦争で国連軍の最高司令官になったマッカーサーがトルーマン大統領と対立して、解任されるという事件が起こる。これを共和党側は大いに利用するわけで、マッカーサー及びその他の人達を議会に呼んで、政府の政策を批判するというようなことが行なわれた。これが上院の軍事委員会と外交委員会の合同による

「極東の軍事情勢」に関する聴聞会と言われるもので、いわゆる「マッカーサー聴聞会」と言われております。

そしてさらに「太平洋問題調査会」聴聞会、ここに書いてございますが、太平洋問題調査会というのは、アメリカにおけるアジア太平洋問題の専門家、つまり研究者、学者、それから財界人、ジャーナリスト、そういう人達の集まりであつて、そこに反蒋介石、親共産党あるいは親ソ派がいるといつて、この調査会の人達を議会に引張りだして調査をするといつて、それが行なわれていつたんですが、朝鮮戦争といつて異常な空気の中で、最初の、つまり「国務省員の忠誠調査」では共産黨員もしくは不忠誠な官吏はいないといつて結論であつたものが、この段階になりますと、共産党もしくはそれに同調するものがかなりいるといつて、つまり結論が逆転して参ります。

その結果、国務省の役人達もかなり辞めざるをえなくなつていく。あるいは追い出されてしまいます。それから学会の中でも、アジア研究者達が色々な圧迫を受けるといつて、そういう時代に入つて参りまして、当然中国に対するイメージといつてものが最悪になつて行つたわけでありませう。

それでマッカーシー旋風とは、共和党の側からしますと、第二次大戦中から中華人民共和国の成立までの中国政策をになつてきた民主党政権の中国政策に対する攻撃であるといつて、言うことが出来ます。つまり民主党政府のやり方が悪いから、中国は共

産化したんだ、だから中国を「失なった」のだというような議論であります。これに対して、民主党政政府の主張は、中華人民共和国ができる直前、つまり一九四九年八月にアメリカ國務省が出した『中国白書』に見られます。この白書では、要するに中国国民党が敗れて共産党が勝利したのは、アメリカの援助あるいはアメリカのやり方がまずかったからではないんだ、これは外部のものであるアメリカにとっては、どうすることもできない、つまり、中国内部の変化、内部の要因によって革命が起こり、革命が成功したんだというのが、この『中国白書』の言い分でありまして、従って、民主党政権には責任がないということにもなるんですね。これに対して、マッカーシーらの攻撃は、要するに国民党が負けたのは、アメリカの支援が少なかったからである。で、なぜ少なかったのかというと、これは國務省にいる共産主義者が裏切ったからである。つまり、彼らは国民党が負けて、共産党が勝つように政策をねじ曲げていったからだ。これは裏切り説とか陰謀説とか呼ばれますけれども、それとソ連の対中国政策とが結び付いて、結局共産党が勝って、国民党が負けたんだというのが、この派の主張であります。

これは朝鮮戦争という異常な空気の中では俗耳に入りやすいものでした。しかしこれは危険な主張であって、中国革命というものを内部の問題としてではなくて外部の問題、つまりアメリカとソ連とが中国の革命に影響を与えて、それを動かしたんだという、

まさに冷戦時代の思考とっていいと思います。こうした見方というのは、結局ベトナム戦争にまでつながっていくわけですね。アメリカはベトナムの状況を、ベトナムの内部の問題として理解するよりも、中ソの侵略に対してアメリカがそれを防ぐべきだという、そういう論理で進んでいくことになるわけで、そうした見方がここに作られているとってよいと思います。

それから第三番目としては、さっき申しましたように、マッカーシー旋風の結果、國務省の中国専門家達は次々に排除されていきます。特にこの人達は、中国生まれ、中国育ちという人が多かったのですけれども、そういう専門家が排除されていったことによって、アメリカ國務省の中国政策というものが不健全になっていく。

それからアジア研究者あるいはジャーナリスト達へも圧力がかけていくわけで、つまりアメリカの中国観、あるいはアメリカのアジア観というものを非常にねじ曲げてしまふ役割を果たした。そして結局台湾の中華民国政府が中国を代表する正当政府であるという立場を維持し、中華人民共和国は朝鮮における「侵略者」であり、従ってこれを封じ込めるべきである。そして中国を封じ込めれば、中国は共産党の独裁支配であるから、人民の支持をうけていないので崩壊するだろうという、そういう仮定に立って、この後二〇年にわたって封じ込め政策を続けることになりました。これはアメリカの中国観という観点からいいますと、非常に不健

全な時代であったというふうにいうことができません。しかしそれを打ち破ることはなかなか容易ではなかったわけで、時間の関係で省略いたしますが、結局こうした状況が打ち破られるのは一九七二年、つまり二〇数年経ってやっと打ち破られるわけで、それは七二年に共和党のニクソン大統領が中国を訪問いたしました、ここにアメリカの中国政策が大きく転換することになるわけであります。

その理由としては、第一に、中国は崩壊するどころか核兵器を持った大国になってしまったという現実がありました。実はアメリカはこの当時ベトナム戦争に失敗して、ベトナムからどうやって手を引くか、軍隊を引き上げるかといった問題があったんですね。その時に中国がどう出てくるか、つまりベトナムからアメリカ軍が引いた場合に、かわりに中国が出て来たら、こればアジアが大変なことになるといのがアメリカの心配でした。そこでむしろニクソンとしては中国を封じ込め、孤立させるのではなく、中国と関係を改善して、中国を国際社会にひき入れて、中国にアジアの情勢を安定化させるために協力してほしいという、そういう期待がありました。

それからもう一つは、アメリカが中国と関係を改善することは、対ソ関係において有利であるということも勿論ありました。とくに中国の側からすれば、当時アメリカよりもソ連の方が軍事的な脅威であるという状況にあったわけです。そういう両者の利害に

よって、結局ここで関係改善が行なわれたわけでありませう。

しかし、この関係改善のお膳立てはすべて秘密裏になされまして、この前年に、キッシンジャー大統領補佐官がひそかに北京を訪問して、中国の周恩来首相と協議して、ニクソンが翌年訪問するということを突然発表するわけです。全て秘密の内に行なわれたということは、それだけアメリカ国内に問題があった。中国との関係改善のコンセンサスが、まだ十分ではなかったことの反映であると思います。従って、こう政策を大きく変えていきますと、アメリカ国民の中国観というものも変わっていくなければ、ニクソンの政策も成功しないわけです。そのための努力が色々となされますが、その象徴的な一例を挙げますと、その同じ年ですね。七一年の七月というのは、丁度キッシンジャー大統領補佐官が中国を訪問した時期ですが、この時に上院外交委員会は、さっき挙げましたサーヴィスという元外交官、それからジョン・デーヴィスというこれも元外交官、それからジョン・フェアバンクという、これはアメリカにおける中国研究の大御所といわれる人ですが、この三名を呼んで公聴会を開いております。

この席上でフルブライト委員長は、私たちは間違っていたと、つまり、サーヴィスやデーヴィスというような、当時の外交官達が分析した報告が、今になってみれば正しかった、それを我々が否定したということは、大変不明を恥なければならぬといって、ここで名誉回復といいますが、つまり議会の場でもこうした転換

が起こっていくわけですね。そうしたことが他の分野においてもなされていきまして、たちまちアメリカにおいても中国ブームが起こっていきました。当時、七三年頃、私はアメリカにおりましたけれども、特に若い人達は中国への関心と憧れを非常に強く持つようになっておりました。

しかしこれほどこじれた米中関係というものは、そう簡単には修復しえなかったわけで、ここに書きましたように、特に一九八九年の天安門事件以来、人権問題や経済摩擦の問題等で、アメリカと中国との関係はギクシャクし、そうした中でどういう中国観を作っていくのかということは、今後の課題になっていると思います。

そしてその中で台湾問題が、依然として両者の間の大きな障害になっていることは言うまでもないと思います。

実は中村先生からは、最近アメリカの学者達はどういう中国研究をやっているのかということにも触れて欲しいというご希望がありました。私も時間もなくなりましたし、私自身最近アメリカへ行っておりませんので、あまりはつきりしたことは言えないのです。関心のある方はレジュメの参考文献に掲げた二論文^(注3)を見て頂きたいと思います。

一言で言えば、従来のアメリカの中国研究及び中国観というものに対する反省から、非常に多様な研究が進められつつある。そういう意味ではやっぱり模索の時代だというふうに私は考えてお

ります。

そして、日本の中国観についても違った意味で、やはり新しい模索が必要なんだろうというふうに思っております。

大変な駆け足で分かりにくかったと思いますが、これで終わりたいいたします。

注1 本講演の直後に、邦訳が出た。宋強、張蔵蔵他著、莫邦富、鈴木

注2 H・R・アイザックス著、小浪充・国弘正雄訳『中国のイメージ』(サイマル出版会、一九七〇年)

注3 国分良成『アメリカの中国研究』(『現代中国研究案内』2所収、岩波書店、一九九〇年)

佐藤慎一『アメリカにおける中国近代史研究の動向』(『近代中国研究案内』所収、岩波書店、一九九三年)